

二〇一七年度国文学会彙報

二〇一七年度国文学会活動状況

△新入生歓迎会▽ 学生会主催

二〇一七年四月五日(水) 新島会館

△国文学会総会・研究発表会・講演会▽

二〇一七年七月二日(日) 良心館三階三〇五教室

・総会

・研究発表

『万葉集』巻一五・三六八八番歌における呼称をめぐって

——「韓国(からくに)に渡る我が背は」を中心に——

本学大学院博士後期課程 櫻井ちひろ

『仮名草紙 国性爺実録』と浄瑠璃『天智天皇』

本学大学院博士前期課程修了 永田郁子

私学教育と国語

——「先生」と「国語」の位置——

洛南高等学校・附属中学校教諭 木村能章

・講演

今昔物語集の語彙

——動詞から見る和漢混淆文の特徴語——

本学教授 藤井俊博

△国文学会研究発表会・講演会▽

二〇一七年二月三日(日) 寧静館五階会議室

・研究発表

壬生狂言における『壬生寺縁起』

本学大学院博士前期課程 八木智生

戦後日本における『紅楼夢』論争の受容とその問題点

本学大学院博士後期課程 藤原崇雅

・講演

近世堂上歌壇の作歌事情

本学助教 大山和哉

・講演 同志社大学文化学会共催

日本の伝統文化を継承する

——雛人形の世界——

雛人形コーディネーター 安藤啓子

△国文遊歩▽ 学生会主催

第一回 二〇一七年六月二十五日(日)

鞍馬寺、貴船神社

第二回 二〇一七年一月九日(日)

漢字ミュージアム、西行庵

△国文合宿▽ 学生部会主催

二〇一七年八月二日(金) ～ 二二日(土)

同志社びわこリトリートセンター

△講演会▽ 院生部会主催

二〇一七年一〇月二八日(土) 至誠館三三番教室

戦争はどう語られるか

—— 『平家物語』における合戦と武士 ——

佐伯真一 (青山学院大学教授)

△ゼミ相談会▽ 学生部会主催

二〇一七年一月二四日(金) 二二月一日(金)

徳昭館四階・学生共同利用室

△国文合宿▽ 院生部会主催

二〇一八年三月二二日(木) ～ 二三日(金)

比叡山

△同志社国文学▽

第八七号 二〇一七年一二月二〇日発行

収載論文五編、実践報告一編、資料紹介一編、

インタビュー一編

二〇一七年度国文学会彙報

第八八号 二〇一八年三月二〇日発行

収載論文四編、資料紹介三編

△国文学会会報▽

第四五号 二〇一八年三月二〇日発行

二〇一六年度博士論文題目

平安期物語における継子譚受容

—— 孝子説話型の継子譚との比較を中心として ——

森 あかね

『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究

金 恩 愛

谷崎潤一郎大正期映画テクストの横断的研究 伊 東 未央子

谷崎潤一郎の(メルティング・ポット)

—— 大正・昭和初期の作品における越境的美学 ——

グレゴリー・ケズナジャット

中日近代文学における留学生表象

—— 二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に ——

林 麗 婷

昭和文学における〈笑い〉の主題化

—— 昭和初期から二〇年代、〈笑い〉の理論と実践の相互関

係について ——

佐 藤 貴 之

二〇一七年度修士論文題目

「桐」の表現

丹羽雄一

——『源氏物語』における「桐壺」——

逸翁本『大江山絵詞』の特質

八木智生

自注から読み解く『西山物語』構造論

岡田藍沙

『近代百物語』にみる百物語怪談集の途絶の二因

竹田由佳

二〇一七年度卒業論文題目

オホクニヌシとスクナビコナによる国作り

三浦麻子

神武東征における高木神の発言の考察

広瀬将大

『風土記』における龍宮

澁谷史織

——『御伽草子』との比較を中心に——

『万葉集』巻二・一一七番歌について

永田英生

『万葉集』巻六、山部赤人作九六四歌の表現と解釈について

前田藍子

『万葉集』巻六 一〇一七歌の諸問題について

石垣美紗

『万葉集』巻十二・二九八三の解釈

朴奏彦

——枕詞「高麗剣」の背景——

『竹物語』における「光」とは何か

中村紗優子

『伊勢物語』第六段の特質

太田美冬

『古今和歌集』夏歌巻頭歌考

御手洗靖大

——継承と断絶の藤とほととぎす——

『枕草子』に於ける清少納言独自の発想

——「春はあけぼの」から見る「春」と「あけぼの」の関連性——

富山陽色

『枕草子』「にくきもの」章段から見る清少納言の観察眼

西田舞里子

『枕草子』にみる清少納言の感性と想像力

——「心にくきもの」章段をめぐって——

『枕草子』における連歌

小木曾有

第三者が語る和泉式部

水田成美

『源氏物語』における弘徽殿女御

福田千夏

『源氏物語』における侍女の存在意義

——末摘花を巡って——

藤壺と光源氏の関係

伊藤萌美

——藤壺の心情から読む——

源氏物語における正妻としての葵の上

有田麻佑

『源氏物語』における六条御息所のものが果たす機能

上山詩織

『源氏物語』六条御息所と物の怪

小柳了介

妻の座と紫の上の苦惱

杉本奈保

朝顔の姫君の魅力と結婚拒否

明光千春

源氏物語における柏木の位置付け

老崎いづみ

手習巻の「袖ふれし」詠がもつ機能

柚木里咲

歌壇における物語撰取の様相

——『源氏物語』『伊勢物語』を中心として——

山本柁樹

『とりかへばや物語』における「性」と「性差」の認識

佐々木 毅

『今昔物語集』巻二七「獵師母成鬼擬噉子語第二十三」

からみる老母と鬼

下野 瑛紀

『今昔物語集』本朝部の動物

——犬を中心に——

中西 涼

鴨長明の執着と数寄について

——『発心集』と『方丈記』——

横関 美佳

藤原定家の桜の歌における『伊勢物語』からの本歌取りについて

——月・雪の歌との比較を通して——

津川 恵理子

『新古今和歌集』における月の歌

——八代集の調査を通して——

『東北院職人歌合』を中心にみる職人歌合の目指す傾向・歌論

佐野 匠

阿仏尼く為家と為相からの影響く

「殿下乗谷」において、なぜ平清盛は悪役を担わされたのか

甲斐 早耶香

——『覚一本』と『延慶本』の比較を中心に——

『平家物語』における俊寛

中村 和貴

『平家物語』における木曾義仲の人物像

——諸本による武装表現の差異を通して——

『平家物語』木曾の最期における巴の様相

横笛の人物像と横笛説話の構成

勅撰和歌集における雨

——春雨・夕立・村雨について——

正徹考

——「三日月」と「蛭」の和歌を中心に——

米村 穂乃香

合田 瑞穂

一休宗純と鳥

長野里昂

——鳥のイメージの変遷を通して——

玉藻の前の特異性と魅力について

伊藤菜紡見

『木幡狐』研究

——女人救済思想と狐説話における位置づけ——

大野暖奈

御伽草子『精進魚類物語』から見る食の擬人化

五十嵐 藍

——魚介類を中心として——

『小男の草子』の小男の特性

西谷英一

中世日本文学における植物の擬人化の特徴とその傾向

——御伽草子と謡曲から——

高阪仁美

『新蔵人物語』考

江口未紗

仮名草子の虚構性と教訓性

——『浮世物語』の主人公と作品構成との関連から——

齊藤里恵

江戸版『好色一代男』の出版

——挿絵を中心に——

小寺未夏

『男色大鑑』後半部における西鶴の方法

——金銭描写と性愛描写を中心として——

古家尚斗

『曾根崎心中』におけるおはつの女性像

古村黎子

『心中天綱島』と改作

五十川真琴

『諸葛孔明鼎軍談』における「三国志」劇化の特性

——その出典典拠をもとに——

土屋弘樹

『仮名手本忠臣蔵』の改作方法

——『淀鯉出世滝徳』との関連を中心に——

小林実由

『二谷嫩軍記』の忠度の再評価について

——他作品との比較を中心にして——

大長功二

「蛇性の姪」の主題について

坂口真武

『伊賀越敵討物』の中の『伊賀越乗掛合羽』

——爆発的人気を誇った『伊賀越道中双六』の礎——

岡田真穂

心学もの三作における山東京伝の意図

——教訓性以外の趣向から見る京伝の心学もの——

竹田有希

『椿説弓張月』における保元の乱

——『参考保元物語』と比較して——

炭本陸夫

『チリチリ』描法の誕生

——読本挿絵における葛飾北斎の表現の変化——

北川祐也

忠臣蔵評判の滑稽本

——その意図をめぐって——

「釜盗人」からみる咄の方法

江戸と上方の見越入道像

ウブメ像における「鳥」属性の研究

雁金物の変遷

近世における化け猫

国木田独歩の小説家としての自負

——独歩作品における画家と絵画を視座として——

草枕における二項対立

——漱石と仏教思想——

「修善寺の大患」が与えた影響

——「硝子戸の中」と「思ひ出す事など」

から読み取る漱石の死生観——

森鷗外の語りにおける変遷

森鷗外「エタ・セクスアリス」

——創作方法による虚構性の確保——

岡本 汐里

金谷 千佳子

永治 緑都

中村 崇太郎

田中 来幸

辻井 理加

阿食 寛子

木多見 雄典

横山 さらら

柏井 亜由美

甲斐 直人

鳥崎藤村『破戒』の考察

——自然主義文学作品に内在する社会性に関して——

谷崎潤一郎「二人の稚児」論

——母の死と新しい芸術観——

谷崎潤一郎『痴人の愛』における大正時代の女性の

生き様について

日本文学における猫の表象

——谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」を一例に——

芥川龍之介論

——「西方の人」「続西方の人」から見る芥川の〈母〉像——

色彩とモチーフから見る芥川龍之介「歯車」論

川端康成『新浦島物語』

——社会主義における「平等」を視座として——

川端康成『片腕』における幻想性について

江戸川乱歩「屋根裏の散歩者」論

東 耕介

北本 千晶

川本 真央

大森 有紗

村松 美樹

田中 梨沙

小柳 直士

味方 葵

中山 達也

京子の語りから見る江戸川乱歩「人でなしの恋」論

吉田 岳史

横溝正史「面影双紙」

前田 未来

—— 人体模型の暴くもの ——

兄妹関係から見る夢野久作作品

安間 優

夢野久作「死後の恋」論

豊川 聡美

—— 「語り」から考える探偵小説 ——

「けむりを吐かぬ煙突」における未亡人の役割

郡司 佳奈

—— 墮落した東京に生きる人々 ——

「銀河鉄道の夜」論

上濱 唯心

—— 「ほんとうの幸福」とは ——

昭和六年版『讚美歌』の成立状況と由木康の思想

渡邊 嘉朗

稲垣足穂「チョコレット」論

水嶋 美並

坂口安吾「青鬼の禪を洗う女」論

大西 明梨

—— 「媚態」をめぐって ——

『お伽草子』より「浦島さん」から考える太宰治のパロディ手法

片平 佳奈

太宰治の描く「妻」

—— 女性独白体小説「きりぎりす」「おさん」から ——

杉原 つぐみ

太宰治『惜別』論

—— 織り込まれた史実から読み取る「独立親和」批判 ——

浅井 嵩大

「トカトントン」から見る太宰治の戦後思想

安達 尚哉

「ヴィヨンの妻」論

河野 優貴

太宰治『斜陽』

—— 作品における直治の役割について ——

三田 村恵

織田作之助『螢』

森川 椋土

—— 草稿に着目して ——

詩集『二十億光年の孤独』における谷川俊太郎

福見 綾花

安部公房『壁』における物体

日比 敏志

「R 62号の発明」のメッセージとイロニー

近藤 美友貴

「第四間水期」論

長山 恭介

—— ガジェットから作品を見る

坂下 祐輝

「沈黙」の中のキリスト教

三島由紀夫の『ラディゲの死』に見える天才像

瀬戸口 龍也

戯曲から読み解く寺山修司の世界

高田 美沙希

——初期戯曲『天神』を元に——

『思い出トランプ』考

山口 保香

向田邦子作品における比喩表現

——「かわうそ」「だらだら坂」「花の名前」について——

中村 祐美

『恋人たちの森』、『枯葉の寝床』を通してみる森茉莉

——モデルや結末の比較を交えて——

千刈あがた「予習時間」論

秋山 美沙紀

——昭和三〇年代と風景——

日韓における『火垂るの墓』の作品解釈の差

金 ミン旭

——受谷史を踏まえて——

宮本輝『蜚川』論

菅 良平

——家族の組成と生の在り方——

村上春樹『ノルウェイの森』論

熊谷 洋介

吉本ばなな小説作品の構造特性

曾我 茉有子

——主人公の心理のグラフ化をもとに——

桐野夏生『残虐記』から読み解く「想像」の力

野口 航平

梨木香歩『丹生都比売』における蘇りについて

北角 実由季

坂木司「ホテルジュシー」論

——沖繩の与える影響力——

万葉語「山」とその複合語の語構成

田中 栄美

——漢詩から『万葉集』、二十一代集へ——

「ゆるす」の語史

井上 真理

日本語オノマトペの分類

——共起する語に着目して——

北川 夢香

動詞への接続における「つ」「ぬ」の意味

新聞における句読点の特徴・変遷について

池田 千夏

——読点の用法を中心に——

外来語における表記のゆれについて

木村 真美子

——男女差・世代差・専門性に着目して——

エッセイにおける男女の文体差について

山根 早貴

新聞における各紙面の文体比較

中田 愛理

——一般紙とスポーツ紙——

橋本 綾香

樋口 諒



キヤッチフレーズにおける文体と表現

——映画ポスターと新聞広告書籍の比較——

谷 有紗

Mr. Children 桜井和寿の歌詞に関する文体特徴分析

古川 陽樹

流行歌の曲名・歌詞における語彙・表現の研究

——秋元康を中心に——

田 中美沙